

つてゐるが同じ種であると考へると云ふ、兎に角 *G. biloba* は *G. adiantoides* の直系であると云ふ。銀杏の葉の形態的研究によつて銀杏は Biogenetic principle に従つたと考へる。若木の葉は深く裂けて葉低が長くなり化石 *Baiera* に似るが老樹の葉は浅く裂け葉低は腎臓形である。化石の *G. adiantoides* とそれに近縁の種も同じ變異をあらわす、古い地層の化石は深く裂けた狭い葉である率が若い地層の化石よりも多い。銀杏屬の各種を觀察すればすべての古い種の葉はより深く裂けてゐる。*Ginkgoales* に於ける他屬と銀杏屬に就いても其の起源の古いもの程身は狭く絲狀である。この考へに依つて異なる種として書かれた銀杏の種のあるものを *Ginkgo adianthoides* (UNG.) em. SHAP. (p. 18) に含めた、(p. 18 に表あり)。*Ginkgo adianthoides* のすべての發見された化石を年代順にならべてある。KÖPPEN-WEGENER 説の乾燥地と氣候帯の分布で説明してゐる。最古の化石は Angarida の侏羅層にあるが WEGENER に依れば大体 40° I. にあつたと云ふ。これは現在公孫樹の半野生狀に生育してゐる同じ緯度である。白堊期には *G. adiantoides* はロシアの極東、グリーンランドと北米にあり緯度の法則に合する。第三期には *G. adiantoides* は最初を中心とロシアの極東にありアメリカに於てはもつと北に向ふ、これは WEGENER に依るこの時代に起つた氣候の變化によく一致する。

中新期には氣候が寒くなつて *G. adiantoides* は南に移住した。然し北米では ミシシッピの平原でさえぎられ北米には絶えた。歐州の地中海地方では乾燥が甚しくなつて第三期の植物は亡びた。それで歐州ではごく一小部分にのみ *G. adiantoides* が残つた。アジアの西部でも同じ様な状態であつた。コーカサス。パミール、天山山系、アルタイの氷河の沖積平原は第四期に於て *G. adiantoides* の移動の障害となつた、そして亡びた。東部シベリアに於ては氷の包んだ地域が歐州や西部アジアほど廣くなく形状と海の影響により暖かで濕氣に富んでゐた。こんな状態は第四期を通じて銀杏が生残るのに好都合で、*G. adiantoides* の第四期の化石がアジアの東部から發見された。この地帯ではもつと寒くなる以前に廣く分布し南の方へ移動したであらうと思はれる。尙又こゝでは氣候の變化が少なく、銀杏が生存しつゞけた、然しながら人間がこれを栽培しなかつたなれば滅亡したであらうと思はれる。最後に著者は銀杏の分布と *Cycadean* と *Conifer* の分布を比較した。(北村四郎)

遠藤誠道氏：— 滿洲吉林省顧鄉屯産化石胡桃、第一次滿蒙學術調査研究團報告、第二部、第三編、第二號、(1936.) p. p. 1.-8, t. I. II.

滿洲吉林省の顧鄉屯 (Ku-hsiang-tung) は舊石器層に無數の化石を出したるを以て甚有名になつたが、著者は其中より胡桃の化石を報告したもので、マンシウクルミ

(*Juglans mandshurica* MAXIM.) を第一とし、其變種と考へらるゝ *J. mandshurica* var. *Tokunagai* YENDO. 及び var. *Naorai* YENDO の三であるが、前者はオサクルミ (*Juglans stenocarpa* MAXIN) 即ち *J. mandshurica* var. *Komarovii* SKV. であつて、後者はマルシワオ＝グルミでなければ *J. mandshurica* var. *rotunda* SKV. である。

地質學者は日本の後第三紀からバタクルミ (*Juglans cinerea* L.) の化石がでることを云ふが之は北米種に比するよりは先近くのシナバタクルミ (*Juglans cathayensis* DODE) やマンシウクルミの變品に比較して其然らざることを明にして後眞にバタクルミであることを論じてもらふと幸である。(G. KOIDZUMI)

雑 報

糸のき (ヨコクラノキ) の分布

エイノキ (*Berchemia berchemiaefolia* KOIDZ.) は中部支那要素である、中部支那要素は一般に襲速紀地方に分布し、又は更に玖摩關東地域に及ぶのが普通であるのに、追々調査が進むと妙に分布がひろくなるもので、本要素の内でマネギグサ、ツクシガヤ、の如く東北地方へ及ぶものも發見されて來たが、エイノキも亦西は中部支那、日向、豊前、伊豫、土佐、長門、安藝、備後、隱岐、美作、丹波、但馬、丹後、山城、若狹、越前、相摸、武藏、より越後の市振、苗場山に及び更に陸前國刈田郡小原村上臺に採集さるゝに到つた。

支那にては *Berchemia Wilsonii* (SCHN.) KOIDZ = *Chaydaia Wilsonii* C. K. SCHN. = *Berchemiella Wilsonii* NAKAI と呼ばるゝが予は Wien の博物館で原品を拜見したが我エイノキと區別する要を見なかつた。

Chaydaia の原品は巴里博物館で拜見したが、之は *Berchemia* とは別けた方がよいと思ふ、而南部支那廣西省に産する *Chaydaia crenulata* H-MAZT. は胡先驥氏 (HU HSEN-HSU) は *Berchemiella crenulata* HU とするがよくない、*Chaydaia* は極めて暖地の産で東京や南部支那に分布するものである。(G. KOIDZUMI)

Sinarundinaria (竹筴科)

Sinarundinaria NAKAI は一九三五年に發表されたが、此屬名は一九三一年に南肥植物誌上に發表された *Sinarundinaria* OHWI (sphalmate *Sinoarundinaria*) と混雜するから何とか別の新名にされたいものである。近頃耿以禮 (Y. L. KENG) 氏が *Sinensia* VI. VII. や *Jour. Washin. Acad. Sci.* XXVI. に盛に *Arundinaria* を發表するが皆